

2020. 8. 16 (日) マタイ21:42~46

21:42 イエスは彼らに言われた。「あなたがたは、聖書に次のようにあるのを読んだことがないのですか。『家を建てる者たちが捨てた石、それが要の石となった。これは主がなさったこと。私たちの目には不思議なことだ。』

21:43 ですから、わたしは言うておきます。神の国はあなたがたから取り去られ、神の国の実を結ぶ民に与えられます。

21:44 また、この石の上に落ちる人は粉々に砕かれ、この石が人の上に落ちれば、その人を押しつぶします。」

21:45 祭司長たちとパリサイ人たちは、イエスのこれらのたとえを聞いたとき、自分たちについて話しておられることに気づいた。

21:46 それでイエスを捕らえようとしたが、群衆を恐れた。群衆はイエスを預言者と認めていたからである。

#### <説教>

ユダヤ人の祭司長たちや民の長老たち、パリサイ人たちは、神がお遣わしになった御子イエスを神の子・キリストと認めず、信じようとしませんでした。

それどころか、イエスを憎み、ねたみ、殺そうとしていました。

彼らはイエスを軽んじ、イエスの権威を認めず、神のみこころに従わず、神に逆らっていました。

そやって彼らは自分たち自身の罪に対する神の当然のさばきを身に招こうとしていました。

そのことを二人の息子のたとえ(28-32 節)により、またぶどう園の主人と農夫のたとえ(33-41 節)によってイエスはお教えになったのでした。

イエスは続けて「聖書」を引用し、先のたとえの説明をなさいました。

それによって、イエスを信じない彼らの罪深さ、愚かさを更に明らかになさいました。

また、神と神の御子であるご自分の権威・力を更に明らかになさいました。

さあ、それで彼らは自分たちの罪に気づき、悔い改めるのでしょうか。

21:42 イエスは彼らに言われた。「あなたがたは、聖書に次のようにあるのを読んだことがないのですか。『家を建てる者たちが捨てた石、それが要の石となった。これは主がなさったこと。私たちの目には不思議なことだ。』

「家を建てる者たちが捨てた石、それが要の石となった。これは主がなさったこと。私たちの目には不思議なことだ。」(42)

これは詩篇 118:22-23 です。

「家を建てる者たち」、建築の知識と技量があるはずの専門家たちがこれは全く役に立たない価値のない石だと判断して「捨てた石」が実はその建物にとってなくてはならない大事な「要の石」だった(となった)、というエピソードが背景にあったようです。

詩篇作者はその話を思い起こして、人間の目には価値のない軽蔑すべき物事が、実は神

の目には大事な物事であり、神の御意思と力によって人間の価値判断がひっくり返されるという、神と神の「不思議な」みわざに驚き、神の恵みに感謝と讃美を捧げたのです。

直接的には、真の神を知らず信じない偶像礼拝者（異邦人）の国々（「家を建てる者たち」）が神の民イスラエルを価値無しとあざけり虐待して「捨てた」けれども、神は「不思議な」力あるみわざによってご自分の民を救い、この世にあって価値ある大事な「要の石」としてくださる、そういう恵み深い神への感謝と讃美の歌でした。

それは同時に、真の神を知らず信じず、自分たちの知恵と力に頼り、神と神の民に対して誇りおごり高ぶっている人々（「家を建てる者たち」）の罪と愚かさを明らかにしたものでありました。

イエスはこのような詩篇を引用して、この「要の石」の価値が分からず見下し「捨てた」愚かで罪深い「家を建てる者たち」というのが、イエスをキリストと認めず信じずやがて十字架につけて殺してしまう祭司長たちや民の長老たちなのだ指摘なさいました。

そして、「家を建てる者たち」によって一旦は捨てられたけれども「要の石」となった石というのが、祭司長たちや民の長老たちの主導によって十字架で殺されるけれども神の力でよみがえらされて、ご自分のからだなる教会の「要の石」、「礎石」（エペソ 2:20）、また「かしら」（エペソ 1:22、コロサイ 1:18）となられるイエスご自身のことだと言われたのです。

後に使徒ペテロも次のように説教します（彼もこのときのイエスのみことばを聞いていたことでしょう）。

「民の指導者たち、ならびに長老の方々。…皆さんも、またイスラエルのすべての民も、知っていただきたい。…あなたがたが十字架につけ、神が死者の中からよみがえらせたナザレ人イエス・キリスト…。『あなたがた家を建てる者たちに捨てられた石、それが要の石となった』というのは、この方のことです。この方以外には、だれによっても救いはありません。天の下でこの御名のほかに、私たちが救われるべき名は人間に与えられていないからです。」（使徒 4:8-12）

「あなたがたが十字架につけ」（使徒 4:10）たイエス・キリストとは「家を建てる者たちが捨てた石」（42）です。

そして「要の石となった」（42）お方は「神が死者の中からよみがえらせたナザレ人イエス・キリスト」（使徒 4:10）です。

祭司長たちや民の長老たち一人間一は不信仰の故、罪の故にイエス・キリストに「悪を謀りましたが、神はそれを、良いことのための計らいとしてくださ」った（創世記 50:20）のです。

「これは主がなさったこと。私たちの目には不思議なことだ。」（42）と私たちは神の完全な善きみこころとみわざを覚えて神に感謝と讃美を捧げなければなりません。

こういう神の不思議ななさりようと一方、祭司長たちや民の長老たち一人間一の不信仰、罪深いありようから、ではどうということになるのでしょうか。

イエスは言われます。

**21:43** ですから、わたしは言うておきます。神の国はあなたがたから取り去られ、神の国の実を結ぶ民に与えられます。

21:44 また、この石の上に落ちる人は粉々に砕かれ、この石が人の上に落ちれば、その人を押しつぶします。」

どこまでも不信仰を貫き悔い改めない者たち「あなたがた」から「神の国」は「取り去られ」ます。

これは前に「その悪者どもを情け容赦なく滅ぼして、そのぶどう園を、収穫の時が来れば収穫を納める別の農夫たちに貸すでしょう。」(41)と祭司長たち民の長老たち自身が言ったことであり、彼らへの神のさばきです。

神の十分な恵みを受けていながら、懲らしめも受けていながら、神の力を素晴らしさを知らされていながら神を信ぜず、神がお遣わしになった預言者たちを拒み、ついに神がお遣わしになった神の子イエス・キリストを拒む彼らから神が離れ、もはや彼らを罪のままに罪の中に悪魔の意のままに、神の幸いな御支配の外に放って置かれる、そうやって「神の国」を彼らから「取り去」るとは神の厳しいさばきです。

一方で神は「神の国」を「神の国の実を結ぶ民に」お「与え」になるのです。

ということは神を信じる信仰をお与えになるのです。

もっと正確に言えばイエス・キリストにおいて、イエス・キリストを信じて、イエス・キリストを信じることによって神を信じる信仰を神がその「民」にお与えになるのです。

「民」と訳された言葉は「異邦人」とも訳されている言葉です。

自分たちユダヤ人だけのものだと思っていた（頑なに信じ込んでいた）「神の国」が自分たちから「取り去られ」、「異邦人」に与えられる、しかもその「民」が「神の国の実を結ぶ」と聞いた祭司長たちや民の長老たちの驚きはちょっと想像ができません。

彼らにとってユダヤ人でない異邦人とは全く罪に汚れていて神によって救われる資格が全くない人々でしたから。

ユダヤ人の中にさえ「取税人たちや遊女たち」というどうしようもない“罪人”を見出していた彼らでしたから異邦人などは“話にならない”のでした。

彼らはイエスの言葉に単に驚いたというよりも、すぐさまそれを神への冒涇と取ったことでしょう。

イエスは続けて「また、この石の上に落ちる人は粉々に砕かれ、この石が人の上に落ちれば、その人を押しつぶします。」と言われました。

「この石」とは「家を建てる者たちが捨てた石」「要の石」、イエス・キリストのことです。

ですからこのみことばも、神がお遣わしになった神の子イエス・キリストを信じず、キリストに反抗する者たち—祭司長たち、民の長老たち—へのさばきの宣告です。

「神の国はあなたがたから取り去られ、神の国の実を結ぶ民に与えられます。」というイエスのみことばそれ自体が、ある意味では彼らの心を「粉々に砕」き、彼らを「押しつぶ」すものでした。

でもそれはイエスのみことばを聞いて悔い改めるという意味で心が「粉々に砕」かれ「押しつぶ」されたということではありませんでした。

反対に彼らの心はますます頑なになり、イエスに対する怒りと憎しみが増し加わっていたのです。

21:45 祭司長たちとパリサイ人たちは、イエスのこれらのたとえを聞いたとき、自分たちについて話しておられることに気づいた。

21:46 それでイエスを捕らえようとしたが、群衆を恐れた。群衆はイエスを預言者と認めていたからである。

「自分たちについて話しておられることに気づいた」なら、そのように導いてくださったイエスに感謝して、恐れ入って悔い改めてイエスを信じればよかったです。

しかし彼らはイエスがお語りになったことを、神冒瀆として聞いたし、また自分たちへの当てこすり、自分たちへの冒瀆と取りました。

それでイエスに対しては憎しみと怒りにますます燃え、イエスを殺すために「捕らえようとし」ました。

またここでも彼らは神を恐れたのではなく「群衆を恐れ」ました。

彼らはどこまでも他人の顔色をうかがい、自分たちの身分や利益を守ることが第一であり、どこまでも自分中心、人間中心でした。

同胞ユダヤ人であれ、異邦人であれ、他の人々をどうしようもない救われようもない罪人と見下し、一方で自分たちほど純粋に真面目に厳しく神に仕えている者はいないと誇っていた祭司長たち、民の長老たち、パリサイ人たちでした。

イエス・キリストが忍耐強く、恵み深く、あわれみ深く、たとえをもってそういう彼らの罪を指摘し、罪を認めて、イエスを信じて神に立ち返るように促してくださっていたのですから素直に従えばよかったです、そうしませんでした。

そんな、どこまでも不信仰を続け、悔い改めようとしない「あなたがた」から「神の国」が「取り去られ」とイエスは言われたのです。

「神の国の実を結ぶ民」とイエスは言われました。

「神の国の実」とは先ずイエス・キリストを信じる“信仰”という実であり、“悔い改め”という実です。

ならば「神の国の実を結ぶ民」とはユダヤ人であれ異邦人であれ（祭司長たち、パリサイ人たちのようではなく）、イエス・キリストを信じて悔い改める全ての人々とも言えるわけです。

それが民族や国籍を問わずイエス・キリストをかしらとするキリストのからだであり、キリストが「要の石」となって建てあげられる神の家、神の家族です。

「ギリシア人もユダヤ人もなく、…キリストがすべてであり、すべてのうちにおられる」（コロサイ 3:11）キリストの教会です。

それが私たちです。

キリストが教会の「要の石」となっていてくださっているので、キリストによる神の御支配に私たちは服従するほかなく、「神の国の実」は神が私たちのうちに結ばせて下さるので、

私たちは私たちの罪のために十字架で死なれ三日目によみがえられたイエス・キリストを「要の石」とするキリストの教会として、神の民として、イエス・キリストを信じ、悔い改め、神の御支配に服従する者なのです。